

# 2016 年度湘南藤沢学会「研究助成金」成果報告書

## 立命館大学経営学部生との学術交流

### 慶應義塾大学総合政策学部 3 年 立花勁史

#### 1. 活動日程・会場

2016 年 9 月 9 日(金)～9 月 10 日(土)に、立命館大学衣笠セミナーハウス(西園寺記念館)および、京都府京都市右京区嵐山にて立命館大学経営学部生(琴坂将広准教授の元ゼミ生)との学術交流を行った。慶應義塾大学からの参加者は活動計画書に記載の通りである。

#### 2. 活動の目的

本活動は、SFC の琴坂将広研究会と立命館大学経営学部の元琴坂将広ゼミの学生が合同で開催する学術交流合宿を通して、各人の研究調査の質の向上、及び最新の経営課題に関する知見を深めることを目的としたものである。

今年度から開講した SFC の琴坂将広研究会は、経営学以外を専攻してきた多様な学生で構成されており、その有する経営学の知見は発展途上である。対して、立命館大学旧琴坂ゼミは経営学を主専攻とし、入学当時から経営学を専門に学んできた。そのため、経営学に関してより学習が先行している立命館の学生と、多様なバックグラウンドをもつ SFC の学生の交流から、経営学の深みを捉え、またその多様性を議論する学術交流が可能となると考えた。

これを背景として、琴坂将広准教授の指導の下、時事的な経営課題に関する討議セッションを開催することで、最新の経営課題に関する知識の獲得を狙った。また、両大学の学生がそれぞれの研究を発表し、議論を深めることで、今後の研究の方向性に関して、異なる観点と知見を得る機会を設定した。そして、一連の活動を通して立命館大学とのより深い関係性を構築することによって、大学間の枠を超えた協力体制を構築し、今後の研究会の活動をより円滑に進めることを目指した。

#### 3. 活動内容及び成果

本活動の主な活動内容と、得られた成果は以下の 3 点である。

##### i. 両大学の研究に関する意見交換

本研究会では、大きく分けて論文チームとプロジェクトチームの 2 チーム編成で研究活動を行っている。本合宿では、論文チームに関しては、両校の進捗共有をしながらテーマ設定や研究手法、今後の研究をどのように推進していけば良いのかなどに関して積極的に意見交換を行った。また、プロジェクトチームに関しては、進捗を共有しながら秋以降の活動方針のフィードバックや、今後のプロジェクトの可能性についてについて意見を交わした。

4 年間、経営学を専門として修めてきた立命館のメンバーから新たな視点を得ることができた。また、4 年生を中心とする立命館の学生を身近なロールモデルとしてを得ることができ、今後の研究活動を生活の中でどう計画し、どのようにプロットして実行するかに関するしていけば良いのかというイメージを得ること獲得することができた。

##### ii. 研究会の Corporate Identity の策定

ワークショップ形式で研究会の Corporate Identity (以下、CI)を策定した。CI 策定にあたってはのために、研究会のという組織の位置付けありかたを参加メンバー全員で共有した後に、研究会ロゴの原案をチーム毎に討議したとキャッチコピーを作成した。

研究会として CI のを作成作業を通じて、したことによって、研究会にどのようなマインドで参画し、どのように活動を行っていけば良いのかを各自が深く思考した。結果として、という研究会の大きな方針あり方を、体系的かつ視覚的にまとめることができた。策定された CI は、実際の運用に向けて現在その最終版を作成中である。

### iii. ケース討議による、業界構造分析などの研究手法の理解

合宿以前から事前に大量の公開資料をの読み込んだ上で、「ソフトバンクの ARM 買収の背景の考察と、IoT 市場の今後の成長に関する予測」に関してするケース討議を実施した。どのように企業や産業の構造を整理し、それをどういった指標や方針で各事象に対する優先度を付けて分析するかなど、業界構造分析の方法に関して事前に意見交換した上で、実際の情報をもとにケースの討議を進めた。

SFC 側の学生参加者の多くはケース討議がに参加することが初めてであり、社会で発生した事象を経営学の切り口からにおいてどのように情報を分析し、解釈を行うかのっていけば良いのかという分析のプロセスに対しての理解を深めることができた。一方、立命館の学生は、インターンや研究会活動を通じて実社会とのつながりを密にもつ SFC の学生から、実務においてどのような考え方で公開情報を分析するかに関しての視座を得た。

## 4. 成果と今後の課題

本前述の通り、弊研究会と立命館大学経営学部松浦ゼミ合同合宿の実施によって、経営学の深みと広がりに対する理解を深め、研究会のあり方に関しての討議を進め、また実践的な経営分析の手法に関しての理解を促進することができた。これらをもとに、今後の研究、調査活動を行う上での貴重な視座と知見を得ることができた。

一方で、「ケース討議による、業界構造分析などの研究手法」の理解を深め、ケース討議を基盤とした様々な研究手法や理論構築のための知見を獲得することができた今後。しかしながら、今後継続的に研究会として合宿、もしくはそれに準ずる活動を行う際の課題も浮き彫りとなった。特に大きなが、今回の活動を振り返ってみえてきた。主な課題としては「学生の企画運営能力のサイドにおける合宿の設計力不足」と「基礎的な調査分析能力の不足長期的な研究活動の設計」の2つである。

弊研究会と立命館大学松浦ゼミとの合同合宿は、春に続き二度目の開催である。どちらの合宿も学生を中心に指導教官の支援を受けながら琴坂先生を中心としながら参加メンバーが協働して合宿の設計を行った。しかし、二度の合宿を経て、2 日間の合宿を二度経ても、当日の運営面での準備不足が解消しきれず、当日の対応で修正する場面があった。経営学を専攻する研究会として、こうしたイベントの企画運営力の向上は重要な課題である。研究会としての知見を蓄積し、今後の実施に活かしてという時間の中で消化しきれなかったコンテンツも発生するということがわかってきた。これは、予想以上に各コンテンツが盛り上がったというポジティブな評価もできるが、事前の設計の中で予想して、設計に組み込むことができる部分もあった。今後、実施回数と参加人数が増加することが予想される。合宿という濃密な場を最大限活かすためにどのように、何を実施すれば良いのかをこれまでの合宿実施から得た経験を元にさらに効果的な設計を模索していきたい。

また、分析にあたって、基礎的な情報収集と分析の能力の不足が浮き彫りとなった。個人的に経験を蓄積した一部の学生が議論をリードする反面、資料の読み込みと分析の不足する参加者が十分に討議に参加できない側面が確認された。当日の討議から全体としての大きな学びを得たのは確実であるが、個々人が十分な準備を行い、基礎的な分析能力を磨き込むことで、より効果的な合宿の設計が可能となるはずである。例えば、のために、合宿を事前に組み込んだ上で普段の研究会活動を行っていくなど、基礎的な研究調査の能力を向上させ、必要性も感じられた。もちろん、経営学という共通の領域を持っている。だが、さらにミクロな切り口で共通の軸を持つことによって、別の環境にいる組織同士が合同で集まり場を創ることの効果が高まる。そのために、この合宿の場を見据えて、半年～1 年という長期的な時間軸の中で各人の能力向上を検討する必要性が明らかとなった長期的な設計が必要である。

## 5. 謝辞

本合同合宿の開催にあたり、資金面でのご援助を頂いた湘南藤沢学会様に、深く御礼申し上げます。また、合宿場所を提供いただき、本研究会の活動への貴重なご理解とご支援を頂いた立命館大学松浦ゼミの皆さまにも、深くお礼申し上げます。